流通科学大学論集―人間・社会・自然編―第 31 巻第 2 号，77-86（2019）

首尾一貫感覚の形成に関連する要因について
― 意思尊重と信頼感の影響 ―

Factors Related to Sense of Coherence
― Influence of Respecting Intention and Trust ―

銅直 優子*
Yuko Dobeta

本研究は、家庭環境における一貫性のある経験、バランスのとれた負荷の経験、結果形成への参加の経験の 3 つの経験が信頼感の形成に与える影響、そして信頼感が SOC の形成に与える影響について検討を行った。その結果、家庭環境においては、結果形成への参加への経験（意思尊重の経験）が信頼感に影響を与え、自分や他人への信頼感が有意味感に影響を与え、不信が処理可能感と把握可能感に影響を与えることが示唆された。
キーワード：首尾一貫感覚（SOC）、信頼感、家庭環境における 3 つの経験、意思尊重

Ⅰ．はじめに

Antonovsky により提唱された首尾一貫感覚（Sense of Coherence:SOC）はストレス対処力の一つであり、この能力の高い人は、ストレス状況においてもしなやかにその状況に対応することが可能で、健康を維持することができるといわれている[1)]。SOC は、直面した出来事を自分にとって理解できるものとして認知する能力である把握可能感（comprehensibility）、直面した問題を自分の力あるいは他人の力を借りながらでも対処することが出来ると感じられる能力である処理可能感（manageability）、そして、日々の直面した出来事が不幸なことであっても自分にとって意味のあることだと捉えることのできる能力である有意味感（meaningfulness）の 3 要素で構成されている。SOC 研究においては、SOC を 3 要素でとらえるよりも合計得点でとらえていくことが主流であるが、SOC を 3 要素でとらえていくことは、SOC の構造を理解するため、SOC の形成促進におけるアプローチに役立つため、3 要素での検討は重要である。

近年の SOC 研究は、SOC の形成要因や SOC を高めるための効果的な介入方法などが増えつつある。SOC の形成には、乳幼児期の個人にとって最も重要な人物となる養育者との関係のあり方が強く関わっているとされており、思春期には帰属している社会階層の環境が強く関わっている

*流通科学大学人間社会学部、〒651-2188　神戸市西区学園西町 3-1
（2018 年 8 月 29 日受理）
©2018 UMDS Research Association

と考えられている。このような中でSOCの形成には、一貫性のある経験、バランスのとれた負荷の経験、結果形成への参加の経験の3つが重要だとされている。

一貫性のある経験とは、ルールや規律が明確でルールに関する責任の所在が明確であることであり、例えば、親からの指示がその時々で変わり、それには一定の法則がなく単に親の気分よるものであれば、そこにはルールや規律は全くない。明確なルールや規律があれば、たとえ指示内容が変わってもそこには明確な説明がなされ、納得のいくものであろう。バランスのとれた負荷の経験とは、外からの要求がその人の能力を大幅に超えたり、あるいは大幅に下回るようなものでないことである。例えば、高校受験に対する親からの期待が偏差値60の高校入学であったとする。しかし、本人の成績は常に偏差値50前後である場合には、それは本人にとって過大な負荷となる。本人の成績が常に偏差値57～58であれば、その要求は本人の能力を大幅に超えたものとはならず、バランスの取れた負荷となる。結果形成への参加の経験とは、目の前の課題を自分の意思において遂行しそれが結果に影響することであり、例えば夏の家族旅行を決める場合に、親に決められたことにのみ従うようであればそれは楽しいことであっても、その旅行を決めることについて本人の意思は一切関与していない。しかし、その旅行を決めるまでに、どこに行きたいのか、どの様に過ごしたいのかなどを話し合い、行き先は親の希望の土地となったが、過ごし方については自分の意見が反映されたとなれば、話し合いに参加し自分の意見が家族旅行のあり方に影響を与えたことになる。もちろんこの中で扱われるテーマの重要度によって本人に与える影響は違ってくるが、日々の生活の中では重要度の大きなものから小さなものまでさまざまなことが3つの経験に関わってくるだろう。

次にこのような経験が信頼関係に与える影響について検討していく。一貫性のある経験の中では、起こっていることにある一貫したルールや法則が見いだせれば、自分の身を置いている状況や世界に対する安心感や信頼感が育ってくるだろう。バランスのとれた負荷の経験の中では、ある程度努力すれば自分がそのことを成し遂げたり、周囲の期待に応えられることで自分の能力や自分の存在への信頼感が育ってくるだろう。結果形成への参加の経験の中では、家庭や社会という集団のなかで自分の意思が反映され、その意思がその集団における結果に何らかの良い影響を与えることで、自分の身を置いている集団への信頼感やその中で役割や能力を発揮できる自分への信頼が育ってくるだろう。このように、SOCで重要といわれている経験は自分自身も含めた自分を取り巻く環境に対する信頼感を育てるものであると言えよう。

他者の一貫した行動が信頼関係の形成に重要な前提条件であるという指摘[2)]や集団の中でのやりとりに実際に参加した経験が高校生の信頼感に影響をもたらしている[3)]ことなどからもこれらの経験は信頼感に影響をもたらすと考えることが可能である。

他者への信頼の低さや不信の強さは、他者の言動を被害的に認知する傾向を強めるだろうし、自分への信頼が低ければ安心感をもって他者と関わることを困難にする場合もある。このように

他者や自分に対する信頼をもつことは我々が生きていくうえで良好な対人関係を保つ一つの要因ともなるだろう。

エリクソンの心理社会的発達の第 1 段階である基本的信頼感の獲得でも、母もしくは母の代わりとなる人物との関わりは重要であり、個人を取り巻く社会でどの様な体験をし、どの様に関わっていくかのプロセスにおいて、社会と自己の葛藤を経験し、ある危機を体験し、その段階をうまく適応できるか否かが個人の自我形成に大きな役割を果たすと考えられている [4)]。ここで獲得した基本的信頼感はこの時期だけの問題ではなく、その後の養育者や周囲との関わりの中で気まぐれな対応を受けるような経験が多ければ、信頼感は低くなってくるだろうし、ルールをもった一貫した周囲からの安定的な関わりを受ける経験が多ければ、信頼感は更に形成されていくだろう。このように見ていくとエリクソンの基本的信頼感の獲得における外界からの関わりは一貫性のある経験を述べていると考えて良いだろう。エリクソンは基本的信頼感を述べる際に、他者への信頼だけではなく自己への信頼も含んでいるとしているが、信頼感の発達順序としては、外界からの反応によって自分の快-不快という原始レベルでの反応が生じると考えた場合には、自分の快-不快を生じさせた外界つまりは他者への信頼がまずは発達し、それに影響を受けながら、自分への信頼が育っていくと考えられる。

これまでに述べてきた 3 つの経験があれば SOC は形成されるわけではなく、これらの経験を通じ信頼感を築いていくことによって、外界への認知の仕方が変わってくると考える。他人への信頼が強ければ、外界への認知は肯定的な方向に傾くと思われるし、自分への信頼が強ければ、目の前の課題や対処しなければならいことに対して、自分が対処できるという感覚が出てくると思われる。つまりは、3 つの経験が信頼感を形成する要因となり、信頼感は SOC を形成する要因となるだろう。

そこで、本研究の目的は、大学入学前までの家庭環境における 3 つの経験が信頼感の形成に影響を与え、そして信頼感が SOC の形成に影響を与えるという仮説モデルを基に、最終的に適切なモデルを検討することにある。

信頼関係と SOC の 3 要素の関連は、有意味感は他人への信頼と自分への信頼との関連が強く、処理可能感と把握可能感は不信との関連が強いことが分かっている [5)]。このことから、以下の 2 つの仮説モデルを考えた。家庭環境が他人への信頼と自分への信頼に影響を与え、他人への信頼と自分への信頼が有意味感の形成に正の影響を与える仮説モデル 1（図 1）を考えた。このモデルでは、他人への信頼が自分への信頼に影響を与える可能性も考え、他者への信頼から自分への信頼に向かうパスも入れている。次に、処理可能感と把握可能感については、家庭環境が不信に影響を与え、不信が処理可能感と把握可能感の形成に負の影響を与える仮説モデル 2（図 2）を考えた。

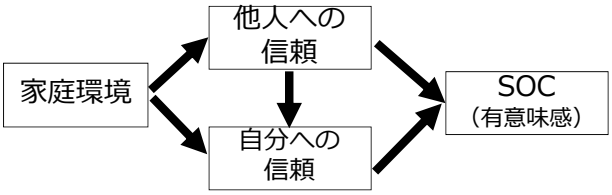

図 1. 有意味感に関する仮説モデル（モデル 1）

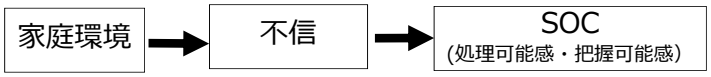

図 2. 処理可能感と把握可能感に関する仮説モデル（モデル 2）

Ⅱ. 方法

１. 調査対象者及び調査手続き

調査対象は、関西私立 A 大学心理学関連講座を受講している男女大学生で調査協力に同意が得られた 178 名である。授業中に調査用紙を一斉配付し、その場で回収した。分析対象は、回答に不備がみられた 13 名を除いた 165 名（男性 116 名、女性 44 名、不明 5 名）である。平均年齢は 19.61 歳（標準偏差 1.34）であった。調査期間は、2017 年 6 月と 10 月、2018 年 6 月である。

２. 調査用紙

〔SOC スケール〕　Antonovsky が作成した 13 項目を山崎らが日本語に翻訳したもの[6] を使用した。本調査用紙は 7 件法で回答するようになっており、1 点から 7 点（逆転項目の場合は 7 点から 1 点）として得点化した。本調査用紙は、把握可能感、処理可能感と有意味感の 3 要素から構成されており、各要素の質問項目数と内容は次の通りである。把握可能感は、「あなたは不慣れな状況の中にいると感じ、どうすれば良いのか分からないと感じることがありますか？」、「あなたは、本当なら感じたくないような感情をいだいてしまうことがありますか？」などの計 5 項目から構成されている。処理可能感は、「あなたはあてにしていた人にがっかりさせられたことがありますか？（逆転項目）」、「どんな強い人でさえ、時には“自分はダメな人間だ”と感じることがあるものです。あなたは、これまで“自分はダメな人間だ”と感じたことはありますか？（逆転項目）」などの計 4 項目である。有意味感は、「あなたは自分の周りで起こっていることがどうでもいい、という気持ちになることがありますか？（逆転項目）」、「今まであなたの人生は・・・（回答：1．明確な目標や目的は全くなかった～7.とても明確な目標や目的があった）」などの計 4 項目である。3 要素の得点と、全項目の合計得点を算出した。

〔信頼感尺度〕　天貝の信頼感尺度[7] の項目内容に若干修正を加えたもの[8] を使用した。回答方法は、「全く違う（1 点）」から「非常にそうだ（6 点）」の 6 件法である。質問紙は、「不信」、

「自分への信頼」、「他人への信頼」の 3 因子で構成されている。

〔家庭環境の 3 つの経験〕　大学入学前までの家庭環境における「明確なルールの存在」、「バランスの取れた負荷経験」、「結果形成への参加の経験」を尋ねる質問項目を独自に作成した 9 項目である。これまでの養育環境について尋ねるため、「大学入学以前までのあなたの家庭環境についてお尋ねします」という教示文を設けた。回答方法は、「非常に多かった（4 点）」から「ほとんどなかった（1 点）」の 4 件法である。

Ⅱ．結果

以下の統計処理には、IBM SPSS Statistics 25 と IBM SPSS Amos 25 を使用した。

１．家庭環境の 3 つの経験を尋ねる質問紙の因子分析

「一貫性のある経験」、「バランスの取れた負荷経験」、「結果形成への参加の経験」の 3 つの経験を尋ねるために独自に作成した 9 項目について因子分析（主因子法，プロマックス回転）を行った。固有値は 2.233、1.973、1.186、0.890、0.745・・・と変化しており、固有値 1 を基準にした場合に 3 因子構造と判断し、3 因子での回転を行った。その結果が表 1 である。

表 1．家庭環境における３つの経験を尋ねる質問紙の因子分析（主因子法，プロマックス回転）

		第1因子 意思尊重	第2因子 バランス負荷	第3因子 明確なルールの存在	共通性
1	進路を決めるときに自分の意思（希望）が尊重された	**.612**	−.094	−.090	.370
9	期待されたことは自分にとって実行可能であった	**.548**	.100	.209	.395
2	家族のこと（旅行、ペットを飼うなど）を決めるとき自分の意思（希望）が尊重された	**.544**	−.048	−.100	.294
3	習い事やアルバイトなどを決めるときに自分の意思（希望）が尊重された	**.530**	−.165	.016	.282
7	自分の生き方（行動なども含む）に対して周りから期待されることがあった	.116	**.919**	−.075	.867
8	自分の能力以上のことを期待（要求）されることがあった	−.267	**.529**	.026	.312
6	一度決定したことが変更されることがあった	−.103	**.292**	.086	.103
4	明確なルール（決まりごと）があった	−.115	−.015	**.873**	.758
5	自分にとって納得できるルール（決まりごと）があった	.319	.074	**.383**	.289
	寄与率	16.739	14.662	9.372	
	累積寄与率	16.739	31.401	40.774	

第 1 因子は何かを決める際に自分の意思が尊重された経験があるかを問う内容であるため「意思尊重」とした。4 項目中 3 項目は想定していた項目であったが、項目 9 については、バランスのとれた負荷経験と想定していた項目であった。第 2 因子は周囲からの期待とそれに対する自分

の能力への負荷を問う 2 項目があるため「バランス負荷」とした。しかし、一貫性のある経験の項目として想定していた項目 6 が第 2 因子への負荷量が最も高いが負荷量自体は非常に低いものであったので、今後の分析からは項目 6 を削除することとした。第 3 因子は、明確なルールの存在に対する内容であるため「明確なルール」とした。項目 5 は、第 1 因子にも.300 以上の負荷量があるため、2 因子にまたがって負荷しているため、因子の構造としてはあまりよくないと判断した。今回想定していた 3 因子が抽出されたが、特に第 3 因子は今後慎重な検討を要すると判断した。そのため、今後の分析には、「意思尊重」と「バランス負荷」の 2 因子を使用することとした。

２．下位尺度間の相関関係

各尺度間の関連を見るために相関係数（Pearson）を算出した。結果は表 2 の通りである。

表 2. 家庭環境、信頼感とＳＯＣの相関係数

	家庭環境	3つの経験	信頼感			SOC			
	意思尊重	バランス負荷	他人への信頼	不信	自分への信頼	有意味感	処理可能感	把握可能感	SOC合計
意思尊重	－								
期待要求	-.034	－							
他人への信頼	***.403***	.072	－						
不信	***-.309***	-.010	***-.468***	－					
自分への信頼	.114	.034	***.492***	-.235	－				
有意味感	.229	.130	***.409***	***-.352***	***.463***	－			
処理可能感	.130	-.027	.255	***-.442***	.181	.276	－		
把握可能感	.175	-.016	.233	***-.383***	.136	***.314***	***.547***	－	
SOC合計	.234	.037	***.388***	***-.509***	***.335***	***.689***	***.774***	***.832***	－

注).300以上の相関係数については太文字斜体表示にしている

家庭環境と信頼感では、意思尊重のみが他人への信頼と不信との相関が見られただけで、バランス負荷とは相関が見られなかった。また意思尊重もバランス負荷も SOC のどの要素とも相関は見られなかった。信頼感と SOC では、有意味感は、信頼感の 3 下位尺度のすべてと相関がみられたが、処理可能感と把握可能感は不信との間に負の相関がみられただけであった。

３．モデルの検討

モデルの検討において、家庭環境要因については 3 つの経験を入れる予定であったが、因子分析の結果､「明確なルールの存在」については因子構造として再検討の必要があると判断したこと、また､「バランスの負荷」については、すべての尺度と相関が認められなかったことから、家庭環境としてモデルに入れる要因を「意思尊重」のみとした。

まず初めに有意味感に対して仮説モデル 1 を検討するために共分散構造分析を行った。その結果、適合指標は、χ^2（1）＝2.35（ns），GFI＝.993，AGFI＝.929，RMSEA＝.099，AIC＝20.351 で

あり、十分な値が示された。しかしながら、意思尊重から自分への信頼に向かうパスが有意ではなかったため、このパスを削除したものをモデル 3 として再度分析を行った。その結果、適合指標は、χ^2（2）＝4.212（ns），GFI＝.987，AGFI＝.937，RMSEA＝.082，AIC＝20.212 であり、十分な値が示された。モデル 1 とモデル 3 の適合指標を比較したところ大きな違いはなかったため、モデル 3 を採択した。図 3 に標準化されたパス係数を示す。図に表示されているパス係数は全て有意であった（他人への信頼から有意味感のみ p<.01，その他は p<.001）。

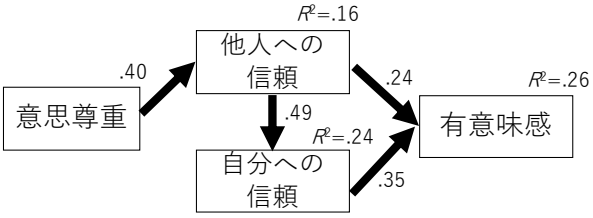

図 3. 意思尊重と信頼が有意味感に与える影響（モデル 3）

自分の意思が尊重された家庭環境は他人への信頼に影響を与え、他人への信頼が自分への信頼に影響を与え、そして有意味感の形成を促進することに影響を与えていることが示唆された。自分への信頼を経由せずに、意思尊重から他人への信頼そして有意味感の形成というモデルも可能性としてはあるが、それぞれの標準化係数をみると自分への信頼を経由した方が有意味感の形成は促進されると考えられる。

次に、処理可能感と把握可能感についてモデル 2 を検討するために共分散構造分析を行った。その結果、処理可能感の適合指標は、χ^2（1）＝.009（ns），GFI＝1.000，AGFI＝1.000，RMSEA＝.000 の値であり、また、処理可能感を説明する分散は 20%であり、モデル 3 が適していると判断した。意思が尊重された家庭環境が不信に負の影響を与え、不信が処理可能感に負の影響を与えることが示唆された。

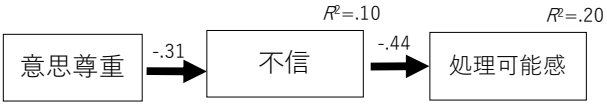

図 4. 意思尊重と不信感が把握可能感に与える影響（モデル 2）

また、把握可能感については、χ^2（1）＝.690（ns），GFI＝.997，AGFI＝.983，RMSEA＝.000 の値であり、把握可能感を説明する分散は 15%であり、モデル 2 が適していると判断した。図 5 に標準化されたパス係数を示す。図に表示されているパス係数は全て有意であった（p<.001）。処理可能感と同様、意思が尊重された家庭環境が不信に負の影響を与え、不信が把握可能感に負の影響を与えることが示唆された。

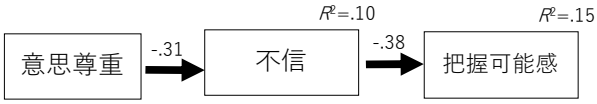

図 5. 意思尊重と信頼が有意味感に与える影響（モデル 3）

処理可能感も把握可能感も意思尊重経験が不信に影響を与え、不信から影響を受けることが分かった。しかしながら標準化係数や重決定数からみると、処理可能感の方が、これらから受ける影響が強いことが分かった。

Ⅳ. 考察

１. 家庭環境の 3 つの経験を尋ねる質問項目について

家庭環境における 3 つの経験を尋ねるために、それぞれ 3 項目の合計 9 項目を独自に作成した。因子分析の結果、3 因子構造ではあったものの予測していた通りの結果ではなかった。

第 1 因子への負荷量が高かった‘期待されたことは自分にとって実行可能であった’項目は、「バランス負荷」を尋ねる項目として作成したが、第 2 因子への負荷量は最も低かった。他の「バランス負荷」を尋ねるための 2 項目とは期待されたことが実行可能であったかどうかを尋ねている部分が大きく違っており、この部分が因子の分かれ方に影響したのではないかと考える。また、そのほかの項目内容を再度見直してみると、「バランス負荷」は、外からの要求が自分の能力に対して過大でも過小でもないことであるから、項目内容としては、少し頑張れば対処可能であったり、自分にはある程度対処できることが多いという内容を同項目内に含む項目を作成する必要があった。

次に、「明確なルールの存在」を尋ねる項目として作成した‘一度決定したことが変更されることがあった’については、全体的に因子負荷量が低かったが、第 2 因子の「バランス負荷」への負荷量が最も高かった。この項目内容では、一度決定したことが単に変更される意味合いにしかとられず、明確なルールつまりその変更に法則性が感じられないという意味が含まれていない。このことが因子の分かれ方に影響したのではないかと考える。また、‘自分にとっての納得できるルール（決まりごと）があった’については、第 1 因子と第 3 因子の両方にまたがる結果となった。この因子については、一貫性を問うような、本人にとって何らかの理解できる法則性が見いだせる環境であったかどうかが伝わりにくい項目となっていた。この点を十分に考慮して今後更に項目を検討しなおす必要がある。

「明確なルールの存在」については、3 項目が 3 つの因子に分かれたような結果となったため、全ての項目について内容を検討しなおす必要があると考える。また、その他の項目についても更に項目を検討しなおす必要があると考える。

２．家庭環境、信頼感が SOC の形成に与える影響について

有意味感に与える影響については、自分の意思が尊重された経験から他人への信頼に向かうパスのみが有意であり、自分への信頼に向かうパスは有意ではなかった。そのため、仮説モデル 1 を修正しモデル 3 で検討した。家庭環境で自分の意思が尊重されるという経験は、周囲が自分の存在を認知してくれていること、また自分の言動を尊重し取り入れてくれているという経験であるが、この経験は周囲への信頼を強くさせるものだと考える。しかしながら、これらの経験は、周囲が自分を受け入れてくれたという周囲への信頼であって、この経験は自分への信頼を強めることには関連しないのであろう。そのため、意思尊重の経験は他人への信頼のみに関連していたのだと考える。また、意思尊重から有意味感にたどり着くパスの流れをみると、他人への信頼から直接有意味感にいくよりも、自分への信頼を経由した方が影響は大きいと判断される。これは、信頼感の発達の方向性としては、まずは他人からの信頼が先に形成されその後自分への信頼が発達すると考えられるため、この順番で 2 つの信頼が形成されていくことが有意味感を高めることに影響をあたえる。そして、2 つの信頼感が有意味感の形成に与える影響は、先行研究と同様に自分や外界への信頼があればそれは被害的な意味づけにはなりにくく良い方向に意味づけがなされ理解される土壌が作られる [9]と考える。

処理可能感と把握可能感に与える影響については、仮説モデル 2 が適していることが明らかになった。家庭環境で自分の意思が尊重されなかったという経験は、自分の意思が尊重された経験が他人や自分への信頼を強めるのとは逆に、不信を強めることが確認された。周囲が自分の存在を認知してくれない、言動を尊重してくれないという経験は「どうせ人は自分のことを大切思ってくれていない」などの不信を強めていくと考える。そして、不信が処理可能感と把握可能感に与える影響は先行研究と同様の結果であり、他人への不信は、困難な状況への対処に際して、「誰も力になってくれない」、「誰かが邪魔をするかもしれない」などの不信感、被害感や不安感を高めやすいため [10]処理可能感と把握可能感に負の関連を示したと考える。

Ⅴ．まとめ

本研究では、家庭環境における、一貫性のある経験、バランスのとれた負荷の経験、結果形成への参加の経験が信頼感の形成にどのような影響を与え、信頼感の形成が SOC にどのような影響を与えるかについて仮説モデルを基に検討をおこなった。その結果、家庭環境における 3 つの経験を尋ねる質問紙についての問題点が明らかとなり、更に質問項目内容を検討する必要性が明らかとなった。しかしながら、自己尊重の経験については、信頼感や SOC との関連が明らかになった。興味深いことに、自己尊重の経験は、信頼感との相関はあるものの SOC との相関は見られなかった。

そして、モデルの検討から、有意味感の形成には、自己尊重の経験が他者への信頼に影響を与

え、他者への信頼が自己への信頼に影響を与え、自己への信頼が有意味感に影響を与えるという関連が示唆された。また、処理可能感と把握可能感の形成については、自己尊重の経験の低さが不信に影響を与え、不信がこれら 2 つの可能感に負の影響を与えることが示唆された。

引用文献

1) Antonovsky A(山崎喜比古・吉井清子 監訳)：『健康の謎を解く:ストレス対処と健康保持のメカニズム)』(有信堂，2001）

2) 諸井克英:「孤独感と対人的信頼感－高校生と大学生との比較を中心として－」『人文論集（静岡大学人文学部)』36（1985）25-42.

3) 天貝由美子:『信頼感の発達心理学－思春期から老年期に至るまで－』（新曜社，2001）第 5 章.

4) Erikson,E.H. (西平 直・中島由恵訳)：『 アイデンティティとライフサイクル』（誠信書房，2011)

5) 銅直優子:「アイデンティティと信頼感が首尾一貫感覚の形成に及ぼす影響」,『流通科学大学論集－人間・社会・自然編―』31,No.1（2018）37-48.

6) Antonovsky A(山崎喜比古・吉井清子 監訳)：『健康の謎を解く:ストレス対処と健康保持のメカニズム)』(有信堂，2001）

7) 天貝由美子:「高校生の自我同一性に及ぼす信頼感の影響」,『教育心理学研究』43,No.4（1995)364-371.

8) 銅直優子:「アイデンティティと信頼感が首尾一貫感覚の形成に及ぼす影響」,『流通科学大学論集－人間・社会・自然編－』31,No.1（2018）37-48.

9) 銅直優子:「アイデンティティと信頼感が首尾一貫感覚の形成に及ぼす影響」,『流通科学大学論集－人間・社会・自然編－』31,No.1（2018）37-48.

10) 銅直優子:「アイデンティティと信頼感が首尾一貫感覚の形成に及ぼす影響」,『流通科学大学論集－人間・社会・自然編－』31,No.1（2018）37-48.

付記：本論文の研究の一部は日本応用心理学第 85 回大会で発表したものである。